



学校・地域・PTAと連携した 「防災サバイバルキャンプ」

いつ起こるか分からない自然災害に対して、
主体的に行動できる児童の育成を目指して



埼玉県 幸手市立吉田小学校
校長 二階堂 朝光

1 はじめに

本校は、幸手市の東部に位置し、昭和59年4月、吉田第一小学校と吉田第二小学校が統合され、開校35年を迎えた児童数83人の小規模校です。校区は、北は茨城県、東は千葉県と接し、南北に約6km、東西に約3kmと広く、その大半が、江戸川と中川に囲まれた沖積低地で、稲作がさかんに行われています。

「今日が楽しく、明日が待ち遠しい学校」という教育理念のもと、保護者、地域の方々が本校の教育活動にとっても協力的で、地域に支えられた学校です。

2 本取組の背景

平成19年度に自治会やPTA、スポーツ少年団等、25団体の代表で組織する吉田小学校運営支援協議会が結成されました。その中で、子供たちの生活体験不足、茨城県南部を震源とする地震、江戸川や利根川等の河川の氾濫といった自然災害に対する課題が挙げられました。

そこで、災害時にとるべき行動や知識の習得、自助・共助の理解、避難所体験等を経験させる必要があるという考えのもと、学校運営支援協議会の主催で防災サバイバルキャンプが実施されてきました。

3 実践の内容

(1) 運営支援協議会での話し合い

年度初めに開催した運営支援協議会で、

防災サバイバルキャンプの日程、ねらい等を確認しました。その後、数回にわたって、代表者会議を行いました。活動内容の検討、当日のタイムスケジュール、役割分担、事前準備等について話し合いを重ね、事前説明会を行いました。

事前説明会では、保護者や地域の方々に加え、中学生の協力もお願いしています。東日本大震災の避難生活でも、中学生が大きな力になったという事実もあり、地域の担い手となることを期待してのことです。

(2) 平成29年度の実践

①起震車体験

今の小学生は、東日本大地震を経験していないか、記憶にない子供たちがほとんどです。そこで、1～3年生は「震度6弱」を、4～6年生は「震度7」を体験しました。この体験により子供たちは、大きな揺れを感じたときの対処の仕方について、学ぶことができました。



起震車体験

②炊き出し訓練

災害の際には、電気やガス、水道など

が使いなくなることがあります。そこで、ポイントとなるのは、調理に薪を使うこと、少ない水で調理や片付けをすることです。薪作りや火の付け方を地域の方に教えていただきました。また、いかに少ない水で調理や片付けができるかを競わせるなど、ゲーム性をもたせることで、手順を考えたり、工夫をしたりするなどの自主性やコミュニケーション力を育てることができました。

③心肺蘇生法講習

高学年ともなると、高齢化の進む地域の中では、貴重な救助要員となります。そのためには、確かな知識と技能が必要です。そこで、人工呼吸と胸骨圧迫、AEDの使用方法といった一連の心肺蘇生法について、幸手消防署の方に教えていただきました。



心肺蘇生法講習

(3) 平成 30 年度の実践

平成 30 年度は、水害を想定して計画を立てました。しかし、当日大型台風が関東地方に接近したため、中止としました。

9月に入り、水害を想定した避難訓練を実施し、高い所へ避難すること、水害時の心構えなどを知りました。校長が、水害ハザードマップやクイズを用いて水害時への備えを子供たちに具体的に考えさせました。



避難訓練後の講話

4 成果と課題

平成 30 年度は台風のため、防災サバイバルキャンプは実施できませんでしたが、幸手市の水害ハザードマップを活用した水害想定避難訓練を実施しました。周辺の河川が氾濫すると二階の屋根まで水没してしまうこと、昨年のような台風がもたらす長雨が自分たちの住んでいる地域で降れば、被害がでたところと同じように川が氾濫してしまうこと、水量は上流の降雨に影響するので、雨が降っていても安全ではないこと、そして、そのような被害は、短時間で襲ってくるので、保護者が出かけている間に自分で考えて避難しなければ大変なことになる場合があること等を知ると、子供たちは避難について真剣に考えるようになりました。

10年間の防災サバイバルキャンプの取組は、貴重な体験を積み重ね、地域と子供たちの防災意識を着実に高めてきました。しかし、災害は、いつ起こるか分かりません。直面する災害に対して、危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動や、備えができる子供たちの育成をめざして今後も取り組んでまいります。